

AND 賞
Archi-Neering Design AWARD
第 5 回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2024





ジャンボ鯉のぼり (1988-、川口衛)
科学（力学）と工学を駆使して生まれた芸術と技術の、美しくダイナミックな姿形。

AND 賞の目指すもの

AND 賞が目指すものは、完成された建築作品としての評価だけではなく、そのプロジェクトがもつ固有の技術的テーマ（構造や環境など）を明らかにし、デザインプロセス、しくみ（システム）やしかけ（ディテール）、素材や施工法などを真摯にイノベーションに追求する人やチームを表彰することである。

「AND」とは、AND 展で見えてきたもの

アーキテクトデザイン（AND）とは、「建築と技術の融合・触発・統合の有様とそれを志向する理念」のことである。2008 年より 12 年以上にわたって国内外で開催されてきた AND 展では、時に 150 点余の模型・パネルが並び、数多くのフォーラムが開催された。

そこから見えてきたものは二つ。

第一に、「建築は織物だ」ということ。連綿と引き継がれる「技術」のタテ糸は強靱であり、感性や社会的欲求を映す「芸術」のヨコ糸により、時代の模様が描かれている。その交点には常に両者の葛藤や協同の物語がある。

第二に、「技術は空間を介して建築とつながっている」ということ。意匠が失われても空間はあるが、構造なくして空間は成立しない。イメージとテクノロジーの有機的な融合・協同の結果として、「美しく合理的な」「合理的で美しい」建築の空間形態が生まれている。そのことは歴史的にも検証されていよう。

AND 賞で評価したいと考える視点

今の時代の頂点としての「点」の建築の評価は既に多くの建築賞で選定されている。

AND 賞は時代が求める建築を、作品という「点」として捉えるのではなく、美しい歴史的建築を実現に導いた一連の芸術と技術の融合というプロセスから学び、未来へ繋げていくという「線」や「面」のような普遍的・横断的視点をもって追求する一貫した姿勢と業績を評価したい。

- ▷ 発想から実現に至る技術的テーマ性のあるデザイン・プロセス
- ▷ 個性的作品性だけではない普遍的技術の創造
- ▷ システム・素材・ディテール・工法などの新しい発想・工夫

新築、恒久的な建築作品だけでなく、再生や仮設、橋など建築以外の構造物、階段などの部位や家具・オブジェなどスケールの小さな作品も本賞の対象としたい。

第5回 AND 賞をめぐって

AND 賞実行委員長 齋藤 公男



齋藤 公男
SAITOH Masao
A-Forum 代表
日本大学名誉教授

1938 年群馬県生まれ /1961 年日本大学理工学部建築学科卒業 /1963 年同大学院修士課程修了 /1973 年同大学理工学部助教授 /1991 年同大学理工学部教授 /2007～2008 年日本建築学会第 50 代会長 /2008 年日本大学名誉教授
主な受賞：1987 年日本建築学会賞（業績）、1993 年松井源吾賞、1997 年 IASS（国際シェル・空間構造学会）坪井賞、2002 年 Pioneer Award、1978 年・1991 年・2003 年・2021 年 BCS 賞、2007 年日本建築学会教育賞、2009 年 IASS Torroja Medal、2018 年日本建築学会大賞
主な著作：「新しい建築のみかた」（エクスナレッジ）、「空間構造物語」（彰国社）

第 5 回となる AND 賞 2024 の最終選考会は 2025 年 2 月 8 日、昨年と同じ日本大学理工学部 CST ホールで開催され、無事終了することができました。心より安堵すると共に、応募された皆さん、選考委員ならびに運営を支えて頂いた運営委員、実行委員の方々に感謝する次第です。

日頃多忙を極める中で AND 賞に応募されたプロジェクトからは時代を切り拓く様々な魅力的なテーマが感じられました。そして長時間の熱心な選考を重ねて頂いた福島加津也委員長をはじめ、堀越英嗣、陶器浩一、磯達雄の諸氏に敬意と謝意を表します。

AND 賞は現地審査はないものの、優秀賞、さらに最優秀賞を決定する最後の場面まで公開することを大きな特徴としています。建築学会賞や JSCA 賞など他の表彰にはあまりみられない難しい選考方法とも言えます。今回の選考会でも各々の選考委員が抱く AND 賞に対する評価軸が吐露されましたが、各自の個性をにじませながらも大局的にはぶれない価値観が共有されていると思いました。各委員と応募者との緊迫したやりとりや、委員同士の強いコメントの数々は実に興味深く、まさに「AND 賞に学ぶ」の言葉が実感されました。

AND 賞への応募数は第 1 回より第 4 回まで各々、55 件、40 件、27 件、32 件。そして今回の第 5 回では 25 件でした。8 作品を選ぶことにした一次選考（2024 年 12 月 21 日）から議論は沸騰し、惜しくも入賞を逃したいくつかはとても気になります。別の機会に是非共もっと踏み込んだプレゼンを聞きたいものです。最終選考に進んだ 8 作品はいずれも独自のテーマをもっており、個性的な建築的魅力、デザインの美しさと共に強い技術的創意や協働性、普遍的な創造性が読みとれました。

全体的に木造の応募作品が多かったように思いますが、個人的に特に印象的だったのは「YAP Constructo 07 - ノマディック ドーム」が優秀賞を受賞したことです。「テンセグリティ」は私にとって卒業研究のテーマとして以来 60 年余りの付き合い。B. フラームもその建築・構造化に辿りつけなかったようにその面白さと難しさは色あせません。恒久建築としては我が国では唯一「天城ドーム（1991）」があるのみです。軽量性と仮設性は普遍的テーマ。本来は万博などの場面で挑戦すべき重要なテーマなのですが、なかなか目を見張るプロジェクトは少ないようです。因みに愛・地球博（2003）で実現した「虹のシザーズ」はそれから 50 回を超える人力による組み立てを行っています。求められるのは美しさに加え、建方・解体・運搬・収納が容易となるシステムとディテール。「適合建築」の新しい可能性を拓くプロジェクトとして、今後の展開を期待したいと思います。

21 世紀もすでに 1/4 を過ぎようとしている今日、20 世紀の建築に比べ、最も影響を与えているもののひとつはいうまでもなくコンピューターの進化と発展です。もはや情報化時代ではなく「情報化社会」であり、デジタル技術やアルゴリズムの浸透のスピードと多様性はとどまる処を知らない感があります。時には方向性を誤ったり、過剰なエネルギーの浪費を促すこともありそうです。一方、BIM や AI はあくまで人間の思考や技術的判断や効率化のための手段（ツール）のひとつ。それ以上の存在ではない、との声も聞こえてきます。

そうした状況を踏まえて、此度、建築学会における 2025 年度開始の特別研究委員会として「アーキニアリング・デザイン研究会」を立ち上げることにしました。テーマは「情報化社会におけるアーキニアリング・デザインのゆくえ」。今後の AND 賞の応募や選考に関わる論点のひとつとして議論を進めたいと考えています。委員会で企画するフォーラムなどにはさまざまな分野の方々に登壇して頂き、関心を抱く多くの方々の自由な参加を期待しています。

思考と工夫、時には閃きを求める構想力、ものづくりへのリスペクトとそのプロセス（設計～施工）を進める情熱。ヒト・コト・モノの物語をつなぐこと。不安を抱きながらも夢や希望をもちながら、そうした思いを問い続けることこそが「AND 賞」が目指すものではないでしょうか。

選考経過と総評

AND 賞選考委員長 福島 加津也



福島 加津也
FUKUSHIMA Katsuya

建築家
福島加津也
+ 富永祥子建築設計事務所
東京都市大学工学部建築学科
教授

1968年神奈川県生まれ / 1990年武蔵工業大学工学部建築学科卒業 / 1993年東京藝術大学大学院美術研究科修了 / 1994年～2002年伊東豊雄建築設計事務所 / 2003年～現在 福島加津也+富永祥子建築設計事務所 / 現在 東京都市大学工学部建築学科教授
主な受賞：2005年JIA 新人賞 / 2019年住宅建築賞金賞 / 2015年日本建築学会賞（作品） / 2018年ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞 / 2020年DAM ARCHITECTURAL BOOK AWARD（ドイツ建築博物館） / 2024年日本建築学会著作賞

主な作品：2004年中国木材名古屋事業所 / 2008年柱と床 / 2013年木の構築 - 工学院大学弓道場+ボクシング場 / 2017年時間の倉庫 - 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 / 2021年高床の家

主な著作：2020 Holz Bau 近代初期ドイツ木造建築 / 2023 ex-dreams もうひとつのミッドセンチュリーアーキテクチャ

工学と美学の融合を目指すアーキニアリングという思いは、現代社会の多様化の中で、環境や建設、改修やものづくりにまで広がります。このため、AND 賞の選考委員も多様になるでしょう。経験豊富な建築家として堀越委員に、構造設計にとどまらない幅広い活動をしている構造家の陶器委員、日本では貴重な建築批評家として磯委員に、若輩の建築家として福島、という4名で構成されています。

今回の一次選考では、日本有数の大手建設会社から、若手の建築家やアーティストまで、幅広い分野から25作品の応募を得ました。昨年度は32作品でしたので、今年度は少し減じたこととなります。その中から、AND 賞の意義にふさわしい8作品が入賞として選ばれて、最終選考に進みました。

当日のプレゼンテーションは発表が4分、質疑応答が6分の計10分です。登壇者のみなさんの説明は、近年にもまして木造への関心が高まっていたことが印象に残ります。そうして、最優秀賞を決める選考が始まりました。例年通り、ここで4人の選考委員がそれぞれの選考基準を明らかにしました。今回のテーマは、堀越委員が「既視感の延長線上」、磯委員が「社会への影響力」、陶器委員が「アーキテクトとエンジニアの対話」、福島が「つくることのデザイン」です。その後、1人4票で投票を行いました。満票の作品が「VOXEL APARTMENT」、3票が「十津川村災害対策品部拠点施設」、2票が「富士ソフト汐留ビル」、「人工林の課題からつくられた小径間伐材の建築」、「YAP Constructo 07-ノマディック ドーム」と2票以上を獲得した作品が5つになりました。例年と等しくここから4作品に絞るため、1人2票でもう一度投票を行ったのですが、最初に2票を獲得した3作品が僅差となり、選考委員による議論でも優劣がつかみません。さっそく、AND 賞特有の緊張関係が始まりました（笑）。選考委員と実行委員会の協議の結果、例年とは異なりますが当初の5作品を最優秀賞の選考に進めることとなりました。しかし、昨年度は例外的に最優秀が2作品となってしまったため、今年度は必ず1作品にするように、と齋藤公男実行委員長から選考委員長に厳命が下がっています（笑）。次の審査がさらに心配です。

残った5作品には、1分で追加アピールをしていただきました。その内容を加えて、今回はより詳細な得点差がつくように、各審査委員が3点と2点と1点を投票するようにしたのですが、なんと「十津川村災害対策品部拠点施設」が7点、「VOXEL APARTMENT」も7点、「YAP Constructo 07-ノマディック ドーム」が6点と、3作品が僅差という結果になってしまいました。ここまで僅差になるとは、もうこれは選考委員長に対する何かの試練なのでしょうか。それぞれの作品の特徴も、地元産材を用いた地方の木造建築、壁式フィーレンデルの都市型集合住宅、セルフビルドのパビリオンと全く異なります。

しかし、さらに目を凝らして投票内容を見てみると、3点を入れている選考委員が2人いるのは「十津川村災害対策品部拠点施設」だけであり、他の2作品は3点を入れている選考委員が1名であったため、このわずかな差を持って、今年度の最優秀作品を「十津川村災害対策品部拠点施設」とすることになりました。優秀賞は「VOXEL APARTMENT」、「富士ソフト汐留ビル」、「人工林の課題からつくられた小径間伐材の建築」、「YAP Constructo 07-ノマディック ドーム」の4作品です。

今回も大変難しい最終選考となりました。毎回ここまで票数が均衡するという事は、AND 賞の評価軸が多様だからでしょう。その特性からすると、最優秀を決めるということには適していないのかもしれませんが、しかし、幅広く奥深いアーキニアリングの世界を、目を閉じて手探りで進むようなこの選考会が、混沌としたように見える現代の建築界を励ます一助になったとしたら、私たちも嬉しいです。次回の審査に向けて、さらなる応募をお待ちしています。

選考を終えて

AND 賞選考委員 磯 達雄



磯 達雄
ISO Tatsuo

1963 年埼玉県生まれ 1988 年名古屋大学工学部建築学科卒業後、日経 BP 社で雑誌「日経アーキテクチュア」の編集に携わる、2000 年独立、2002 年フリックススタジオ共同主宰、2020 年 Office Bunga 共同主宰。

2001 年から桑沢デザイン研究所非常勤講師、2008 年から武蔵野美術大学非常勤講師を兼務。主な著作に『昭和モダン建築巡礼 西日本編／東日本編』（宮沢洋との共著、日経 BP 社刊）、『ポストモダン建築巡礼』（同）、『菊竹清訓巡礼』（同）、『ぼくらが夢見た未来都市』（五十嵐太郎との共著、PHP 研究所刊）など

これまでの回よりも応募数は減ったが、作品のレベルは総じて高い。一次の書類選考でも、どの作品を残すのかが、最後の最後まで決まらなかった。当初は選考委員の中でも支持が少なかった作品が、議論の中で評価が高まり、最終的に通過したケースもあった。最終選考に残った 8 作品は、小住宅から都市公園まで、スケールも用途も様々で比較するのが難しい。いずれが最優秀作になるか、予想が付かない。対面のプレゼンテーションが結果を大きく作用するかもしれないと思いながら、それを聴いた。

それを踏まえて、最終選考会で最初の中間投票で票を入れたのは、「SKIP JOINT SYSTEM」「十津川村災害対策本部拠点施設」「VOXEL APARTMENT」「富士ソフト汐留ビル」の 4 作品である。

「SKIP JOINT SYSTEM」は一般流通木材による架構のデザイン。木造による大スパンを、従来の主流だった大断面集成材ではなく、規格材や小径材で実現しようとする取り組みは、これまでの AND 賞応募作にも見られたもので、昨今の社会的要請と言える。この事例では、木材を長手方向で 3 つに挽いて、それをずらしながらつないでアーチにしている。低いライズのヴォールト天井がシンプルに美しくでき上がっている点からも、これを推した。

「十津川村災害対策本部拠点施設」も木造で、地産の製材を用いたもの。こちらは柱の間を斜材が村章の「菱十字」をかたどるようにつながり、耐震性を確保する。この斜材が周囲の民家と共通する屋根の形に波及し、ファサードのデザインにも現れる。構造・意匠と地域性が強く結びついたデザインだ。

「VOXEL APARTMENT」は 1 辺が 2750mm の立方体がタテヨコに自在につながり全体を構成している。袖壁、垂れ壁、腰壁がフィーレンディールトラスとして働き、キャンチレバーの構造を成立させているという。同じ意匠設計者による「十津川村」と似て、ひとつの構造システムが建物全体に散らばっている。

「富士ソフト汐留ビル」は PC ブロックによる組積造の外郭架構。前回の AND 賞ではコンクリート打ち放しというレガシーに新たな可能性を開いた作品を最後まで強く推したが、今年の候補作でそれに類するのが、この作品かもしれない。開口の小ささについても、それがメリットと位置付けられていて隙がない。

この段階で票を入れなかった作品についても触れておく。「人工林の課題からつくられた小径間伐材の建築」は「SKIP JOINT SYSTEM」と似たテーマを扱い、複雑そうに見えて実は単純な架構のシステムをこちらでも実現してる。しかし「この場所で採れる間伐材」をうたいながら、製材にはそれなり離れたところまで運ぶ必要が生じていて、その点が気になり、推すのをためらった。「YAP Construction 07」は、繊細な構造が美しいものの、「旅するテンセグリティドーム」とのコンセプトに対応する、輸送のデザインに説得力がなかった。「MIYASHITA PARK」は立体都市公園の意義は認めるものの、天蓋架構のデザインと緑化システムの結び付きに弱さを感じた。「KU11」は小住宅に偏心プレースを適用したもの。適度なさりげなさに惹かれたが、今回は構造がより明快な他の候補作に軍配を上げた。

「十津川村～」「VOXEL～」 「人工林～」 「YAP～」 「富士ソフト～」 の 5 作に絞られてからの 2 回目投票では、「十津川村～」に 3 点、「富士ソフト～」に 2 点、「YAP～」に 1 点を入れた。他の選考委員の投票結果と併せて、最優秀賞には「十津川村～」が選ばれた。

「十津川村～」は、地域に由来する建物形態や材料調達から、構造のデザインへと展開し、それが建物全体を規定している。建築と技術の融合を果たしたものであり、結果として、AND 賞の理念に最もふさわしい作品を選び出すことができたと考えている。



陶器 浩一
TOKI Hirokazu

1962 年生まれ。1986 年京都大学大学院修了。1986～2003 年日建設計。2003 年滋賀県立大学助教授 2006 年教授、現在に至る。

主な作品：キーエンス本社研究所ビル、愛媛県歴史文化博物館、愛媛県美術館、梅田ダイビル、兵庫県芸術文化センター、積層の家、清里アートギャラリー、澄心寺庫裏、海光の家、半居、福良港津波防災ステーション、竹の会所、さとうみステーション、クアパーク長湯など。

受賞：JSCA 賞、Outstanding Structure Award (IABSE)、松井源吾賞、日本建築学会賞(技術)、日本建築大賞、日本建築学会作品選奨など

AND 賞も 5 回目の選考となりました。今年もビッグプロジェクトからフォーリーのような小作品まで多種多様な応募作が並び、例年同様選考に頭を悩ませると共に、応募作が多様であること故に AND 賞の目的が浸透してきたようにも思います。多面的にある評価軸の中から何に重きを置くのかは選考員により、年により変わり、これも AND 賞らしいともいえます。

私は今回「対話」に重きを置きました。アーキテクトとエンジニア、設計者と施工者、建築と社会、それぞれの対話の中で建築が高められてゆくことこそが AND の精神といえるので、そのプロセスを重視したいと思いました。その根底にあるのは「正直」であることだと思います。技術を誇張するものでもなく、デザインを押し付けることでもなく、さりげない“技術”とデザインとの対話が新たな空間を生み出し、まちに働きかけているような作品に注目しました。

最終選考で発表された 8 作品はいずれも様々な視点で“AND”の理念を追求したものでしたが、私が一次で投票したものは「十津川災害対策本部拠点施設」、「VOXEL APARTMENT」、「人工林の課題からつくられた小径間伐材の建築」、「MIYASHITA PARK—立体都市公園をなめらかに包む天蓋架構—」の 4 作品で、投票には至らなかったものの「ノマディック ドーム」も気に入った作品です。

「人工林の課題からつくられた小径間伐材の建築」は小径間伐材を用いた屋根架構が印象的で、不完全なトラス架構を並べて直交方向にはしご状の梁を挿入することにより、複雑な接合部をつくることなく軽快な空間をうみだしています。「ノマディック ドーム」は南米チリで学生ワークショップにより作られたテンセグリティドームで、そののち日本で再構築されています。素人の手で構築された空間としては大きなもので、なによりも美しい。自らの手で立ち上げたこの空間を目の当たりにした時のワークショップ参加者の感動が目に見えます。美しいものは人に感動を与え、これも AND の大切な要素だと思います。

「MIYASHITA PARK」は渋谷駅近くにある立体都市公園で、様々な制約の中で多くのブロックをつないで空中公園を実現し、都市に新しい人の流れと賑わいを生み出しています。この天蓋に緑が生い茂れば、今までに体験したことのない緑地空間が実現し、都市にやすらぎと動きを与えるでしょう。

今回最も印象的であったのは、「十津川災害対策本部拠点施設」と「VOXEL APARTMENT」でした。いずれも藤村龍至さんの作品ですが、「対話」という視点でいえば、前者はエンジニアとアーキテクトの対話、後者は建築と都市との対話が特徴的だと思います。

「VOXEL APARTMENT」は 2750 mmグリッドを基本とし、その架構の反復で凸凹のある空間を作り出しています。居住空間、特に外部空間に多くの居場所と変化を与えていますが、それよりも周辺環境に動きを与えている効果が大きく、画一的な都市の表情に動きを与える、まちに開いた建築だと感じました。

「十津川災害対策本部拠点施設」は中山間地域の災害拠点施設ですが、地域で取れる材木の種類を丹念に調べ、欠点も有するそれらの材を活かしながら特徴ある空間を構築してゆく設計プロセスと、その過程での設計者の、素材、地域、技術に対する誠実な姿勢にとても共感を覚えました。ひし形で架構を構成するというひとつのシステムでありながら、部材配置をパラメトリックに変化させることにより動きのある特徴的な空間を素直に実現しています。ダイナミックな架構をつくらうというエンジニアの欲でもなく、恣意的なカタチをつくらうというデザイナーの欲でもなく、素材に素直に向き合ったプロセスが特徴的な空間をうみだし、それが地域や社会に刺激を与えているという点で、この作品に最終票を投じました。

AND 賞選考委員 堀越 英嗣



堀越 英嗣
HORIKOSHI Hidetsugu

1953 年東京生まれ 1976 年東京藝術大学美術学部建築科卒業、1978 年同大学院修了後、丹下健三・都市・建築設計研究所にて東京都庁舎競技設計最優秀案、パリ、イタリア広場、SINGAPORE, MARINA SOUTH、旧赤坂プリンスホテル、横浜美術館等担当 1986 年アーキテクトファイブ共同主宰、モエレ沼公園（イサム・ノグチと共同）、とっとり花回廊、新潟駅舎駅前広場等、2005 年堀越英嗣 ARCHITECT 5 設立、五島美術館改修、正願寺等、日本建築学会賞（業績）、同作品選奨、グッドデザイン大賞、BCS 賞等共同受賞、2001 年鳥取環境大学教授、2004 年芝浦工業大学教授、2017 年建築学部長、2021 年芝浦工業大学名誉教授、2024 年～東京藝術大学客員教授

現在さまざまな建築の賞が毎年選ばれています。これまで私自身も一建築家として、自らの仕事の意義について素直に様々な建築家、評論家、技術者等の評価を聞くことで次への仕事の糧にしてきました。時に落胆し、勇気付けられてきました。その時に心に響く言葉や講評は、選考委員の方々の正直で偏見のない素直な論評でした。経験を積む中で、今度は選考者の立場となることが次第に増え、先に述べたように、正直に、偏りなく、真摯に応募者が目指している方向を読み取り、多くの人が良い影響を受けるであろう仕事について意見を述べるべきだと感じてきました。そのため、時には選考委員の中での意見の相違や、対立も生まれることがありますが、自らの能力の限界の中で、真摯に、正直に評価する姿勢は貫くべきだと信じています。年齢とともに思考の柔軟さがなくなると言われていますが、逆に多くの経験が視野を広げてきていることを実感しています。特に大学での研究・教育と設計の実践を並行してきた視点から、学生たちの新鮮な見方や、社会の硬直的な体制等との狭間で思考を常に新鮮な状態に保つことを心がけてから、少し気持ちが楽になり、客観的に批評、評価ができるようになったと思います。恩師の一人でもある、山本学治は構造研究者、歴史家、評論家という多様で総合的な目線で、建築の意義や価値を述べています。そのことが、斎藤公男先生のアーキニアリング・デザインの視点に通じ、継承され続けていることに可能性を感じ、今回 5 回目となる AND 賞の選考委員を一層新たな気持ちで継続させて頂きました。5 回の賞の選考を通して、他の建築の賞との違いが見えてきたところです。一番は応募者の立場です。建築家はもとより、構造家、技術者が多様なスケールとジャンルで応募しています。それを、多様な立場の選考委員が評価することで、単なる流行のデザインや、完成度での評価とは異なる、哲学と技術の統合に価値を感じる方々の応募を評価することが意義深いと思います。

今回は 25 作品の応募となり、前回と比べ数は多くはなかったが、提出された作品はそれぞれの分野で特別な意義とこだわりの作品が多かったと思います。逆に際立った大作、問題作と言えるものが無いように感じたことが、プロフェッショナルで多彩な視点の応募という AND 賞が目指す本来の意図に合っているのではないかと思います。

一次選考の最初の投票は多彩な提案と多彩な選考委員の組み合わせから、票は少し分散しましたが、集計すると複数の票が集まる作品は限られていました。最終選考に進んだ作品の中で、最優秀賞となった「十津川村災害対策本部拠点施設」は、山間部の施設として環境フットプリントを抑えた地場産材を全数検査でかつ適材適所に 100%採用していること、材料の強度を保ため鋼板を製材に切り込むのではなく挟むなど、きめ細かく少しずつ調整する仕事の進め方は、大量生産で規格材を揃えることで、生じてしまう端材を減らすなど、本質的でサステナブルな仕事の進め方と言えます。そのような一貫した姿勢は抽象的幾何学的明快さを優先するのではなく、適切な空間サイズに合わせた「歪んだ」菱形トラスの構造が、むしろ正直さを表していることに気付かされる。立ち止まりながら進める手法は、これからの建築デザインのあるべき可能性を示している。最後まで残った「ノマディック ドーム」は機能性、実用性を超える美しい垂直性が崇高さを感じる場を作るデンセグリティドームであり、フィーレンデルトラスで離散的構造を忍ばせて都市の立体的外部空間を生み出している「VOXEL APARTMENT」と共に優秀賞に相応しいと思います。

最優秀賞

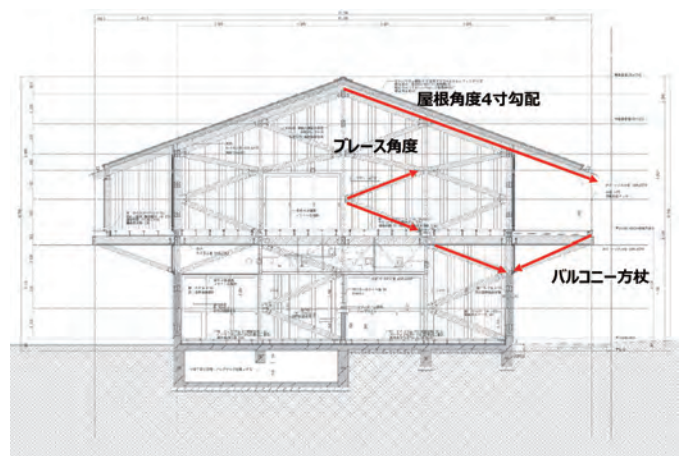
十津川村災害対策本部拠点施設

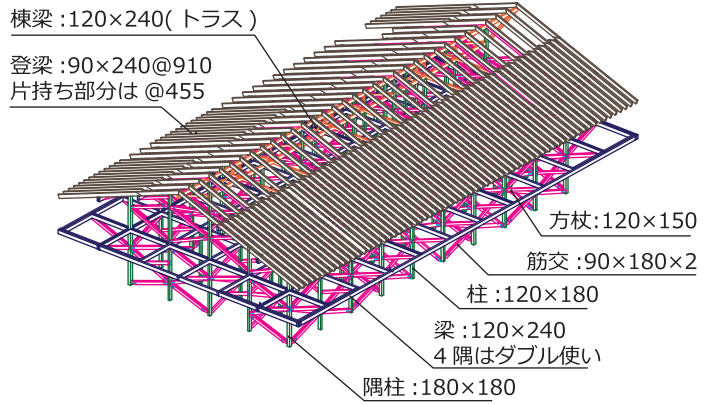
応募代表者：藤村 龍至 (RFA)

共同応募者：金箱 温春 (金箱構造設計事務所)

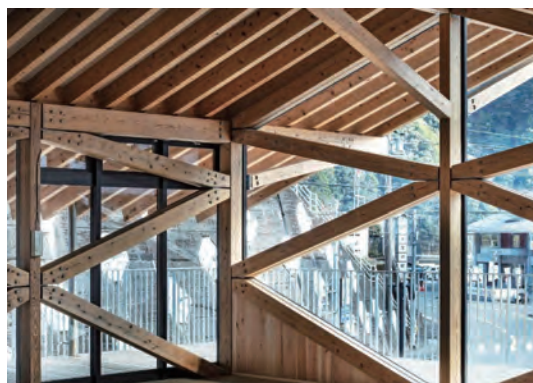
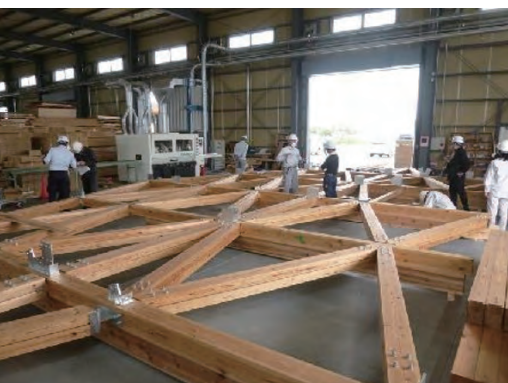


【応募理由】2011年の紀伊半島大水害で大きな被害を受けた奈良県十津川村の庁舎に隣接する、災害対策本部拠点施設である。私たちは十津川の民家に学びつつ、村内で伐採される材木の寸法から構造材の寸法を決め、非 JAS 材の全数検査を実施するなど十津川産材を用いるための具体的な提案を行った。AND 賞ではデジタルファブリケーションや新素材など新たな技術的挑戦が評価されることも多いが、小さな自治体が公共事業でつくる比較的小さな建築における、地域の生産能力に応じた、優しい技術を用いた新たな社会的挑戦もまた、AND 賞のもう一つのあり方としてふさわしいと考え、応募させて頂いた。丁寧にご選考頂きどうもありがとうございました。(藤村龍至+金箱温春)





【講評】建設地は 2011 年の台風 12 号による大きな被害を経て復興した山間の村である。林業が盛んであることから、地元で採れる木を使用した木造建築とすることが選ばれた。調達可能な材は断面径や長さには制約がある。その条件下で村産材を最大限に活かせる構造システムとして導き出されたのが、村の村章でもある「菱十字」の形に柱と斜材を組み合わせる方法だった。斜材は垂木に連なって天井を形成する。さらに斜材は外側に延びて、深い軒やバルコニーを支え、災害対策本部に有益な、広い半屋外空間を建物周りに実現した。「菱十字」の構造は、内外に現れて、空間を規定する。また屋根勾配は周囲に見られる民家の外観とも呼応し、村の風景に建物を溶け込ませている。なお村産材は JAS 材ではないため強度にもばらつきがあるが、個別に強度や含水率を確認し、構造計算に反映させたという。地域性が、材料、構造、意匠と、何層ものレベルで絡まった作品である。そして、木造建築の新たな提案を、屋根の架構だけでなく、建物全体のデザインとしてまとめ上げた点も高く評価したい。地域における中大規模木造のあり方を指し示した AND 建築だ。(磯)



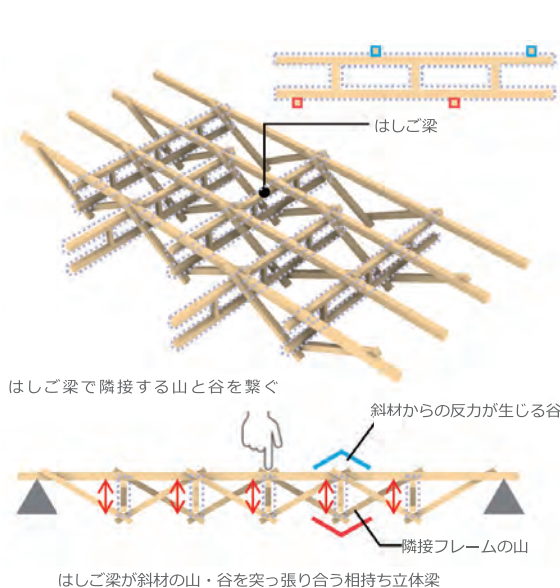
優秀賞

人工林の課題からつくられた 小径間伐材の建築

応募代表者：吉田 敦（竹中工務店）

共同応募者：田中 匠、金子 侑樹（竹中工務店）

【応募理由】本プロジェクトがアーキテクリング・デザインという言葉にとっても親和性を感じたことからの応募であった。昨今、建築領域における木造木質化の勢力は大きくなっている一方、脱炭素社会に資するという観点では本当にそうなのか？と疑問になる利活用事例も多いと感じることがある。森林側の生産体制に対しての妥当性、流通材にすらならない森林資源の課題など日本全国にひろがる人工林に対し無視されがちな課題を拾って生まれた計画の可能性を世の中に広げたい思いから応募した。デザインの観点だけでなくエンジニアリング色の入った賞であり、これまで得られなかった多くの発見もあった。改めて関係者みなさまに感謝申し上げたい。（吉田・金子）



【講評】現地に残る里山を中心とする希少な自然環境をフィールドとした環境学習のための施設。敷地内林の環境整備のために必要な人工林の間伐に伴う材を用いることを前提とし、材を無駄なく使い切ることを考えて設計が行われている。また、半径 60km 県内で製材を完結させた材を余すことなく用いることを目指している。集成材などを用いず小径材を組み合わせて大空間が設計されており、特に、75mm 角材を用いた屋根架構が印象的である。単独では成立しない不完全なトラス架構をずらしながら交互に並べ、直交方向にはしご状の梁を挿入することにより、それらが一体となって大空間架構を成立させ、複雑な接合部をつくることなく軽快で特徴的な空間をうみだしている。木造トラス構造では接合部が複雑な金物で構成するようになりがちであるが、斜材同士は敢えて繋がず、直交材を挿入することで架構として成立させるアイデアが面白い。（陶器）

優秀賞

VOXEL APARTMENT

応募代表者：藤村 龍至 (RFA)

共同応募者：藤田 慎之輔 (DN-Archi)

【応募理由】 広島のみちなかに建つ集合住宅である。周囲には高層の集合住宅が立ち並ぶなか、容積率を消化することをせず、小さくてもまちのなかで存在感を放ち、共感を呼ぶようなあり方を考えた。スタディと解析を進めるうちキューブの集合による凹凸のある形態が生まれたが、その構造は階高を活かした「壁式フィーレンデルトラス」として解釈することになった。屋上スラブに CLT パネルを用いたが、そのディテールは木造住宅における基礎と大引きの関係にも似て、広島の施工者にも負担のない提案とした。そのような試行錯誤を選考のなかで「建築と社会の対話を感じた」と言っていたいただき、とても嬉しく思いました。ありがとうございました。(藤村龍至+藤田慎之輔)



【講評】 都市の集合住宅は最大限の容積と有効率が求められることが多いため、周辺環境に対して矩形や箱型のボリュームで圧迫感を生み出しやすい形態となる性質を持っているが、この計画では集まって住むことで自然にコミュニケーションが生まれる場所を、建築内にとどまらず、敷地を超えた周辺環境との空間ボリュームを生み出す意図からスタートしている。それは設計者が述べている「まちを感じる家」としてのあり方を、建築の立体的ボリュームが作り出す 3D IN-BETWEEN スペースの追求で実現している。この「間」の空間は階高のスケールの立方体格子の構造的フレームのリズムによって人々の日常が自然に顕れる開口部、テラス、バルコニー、回遊する外部階段、路地空間を生み出している。5.5m のキャンチレバーや柱のない 3 次元的な立体空間を成り立たせているのが、階高を利用したフィーレンデル立体トラスであり、複雑な立体的形態であることを敢えて活かした、部分が支え合う離散的構造体である。この土木的スケールの構造によりグランドレベルの空間領域がパブリックな領域として立体的に掘り込まれた稀有な都市の集合住宅の外部空間を生み出していることは特筆すべき提案である。(堀越)

優秀賞

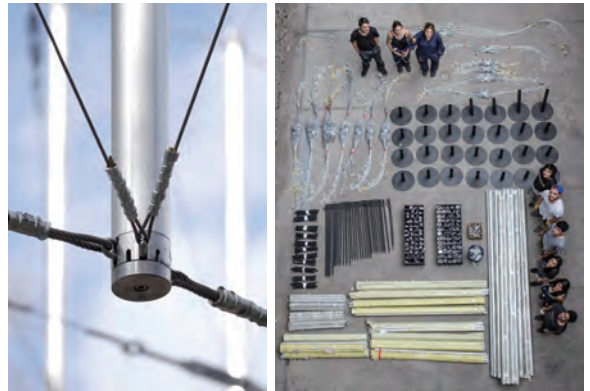
YAP Constructo 07 - ノマディック ドーム

応募代表者：原田 雄次 (ephemeral research)

共同応募者：Claudio Torres、Clarita Reutter、Emile Straub (ephemeral research)

佐藤 淳、古市 渉平 (佐藤淳構造設計事務所)

【応募理由】このノマディックドームをチリで 2017 年に作った後、働いていたチリの建築設計事務所を辞めて日本に帰国しました。その時に一番はじめに声をかけていただいたのが斎藤公男先生方の A-forum でした。それから 7 年の月日を経て日本での移築を実現し、そのご報告とお披露目も兼ねて今回応募させていただきました。審査会では審査員の先生方に組み立て方の問題点や課題を指摘していただき大変勉強になりました。同時に「美しい」という評価をいただき、とても嬉しく感じております。テンセグリティのみならず、エフェメラルな（儚い）ストラクチャの持つ魅力をこれからも探求していこうと思います。（原田）



【講評】この作品は、2017年にチリのサンチアゴで建てられたパビリオンである。テンセグリティ構造を応用した約 300 m²の無柱空間が、3 週間のワークショップでつくられた。学生たちによるセルフビルドのため、アルミパイプとスチールケーブルとの接合部に、寸法調整のためのターンバックルを設けて、組立だけでなく解体も容易にするための工夫がなされている。機能的な要請への実直な対応が、緊張感のある力の釣り合いを生み出し、アルミパイプが宙に浮いているような空間になっている。建築のつくりかたの工学的な検討の積み重ねが、美学的なデザインにたどり着いていることが素晴らしい。2024年には、日本の山中湖に恒久的な施設として再建設されている。主要な部材をスーツケースに入れて、飛行機の手荷物でチリから日本に持ち込むという、まさに旅する建築だ。チリでのパビリオンの機能に加えて、長期的な使用に対応する建築空間として、その使われ方はさらに広がっていくだろう。いつかぜひ、私もこの透き通るような浮遊する空間を体験してみたい。（福島）

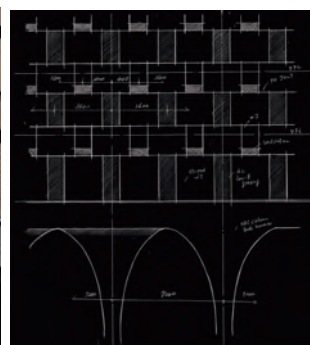
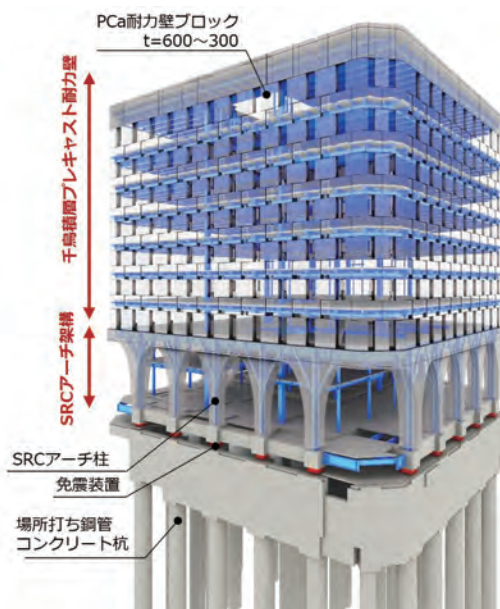
優秀賞

富士ソフト汐留ビル ～現代化された組積造による都市型オフィス～

応募代表者：三橋 幸作（竹中工務店）

共同応募者：田井 暢、柳澤 慎太郎、平尾 雅之（竹中工務店）

【応募理由】昨今の LCCO2 削減、建築仕様・性能の高度化、レジリエンス向上等、複雑に絡まった建築的課題を解決するには、建築家のアイデアと各領域のエンジニアリングを統合しつつ最適化できる新しいシステムが必要だと感じ、私達は、ドミノ・システムが乗り越えた組積造建築に可能性を見出しました。富士ソフト汐留ビルは、「現代化された組積造」をデザインコンセプトとして新規開発された「千鳥積層型外殻 PC 架構」を軸とし建築と構造・設備エンジニアリング、生産技術までをインテグレートした都市型オフィスです。現代建築の課題、新しい架構システムの実現に挑戦した私達のデザインは、「建築と技術の融合・触発・統合の有様とそれを志向する理念」を掲げるアーキニアリング・デザインそのものだと感じ、AND 賞に応募しました。（三橋）



【講評】この計画はオフィスの成熟した既存技術を新たな視点で適材適所に再構成した優れた提案である。「イタリア街」という特異な都市街区の計画で求められる景観に合わせるため、レンガ風の色彩の外壁とアーチというある意味見慣れたボキャブラリーで、一見するとラーメン構造にランダムな外皮を纏わせた「流行の」のビルに見えてしまうが、詳細に読み解くと、「ドミノ・システムのオルタナティブ」と語っている意気込みの理由がわかる。基本的には軟弱地盤と地震国に対応する免震構造をベースにして、地上部分を街並みに調和する大スパンの SRC 構造アーチを基壇とし、その上のオフィス部分を「千鳥積層型外壁 PC 架構の外壁」としている。この外壁は建築・設備・構造をインテグレートさせたデザインコンセプト「現代の組積造」と呼ぶ「正直」な素材と力学による技術の詰まった外装である。地震力を受ける柱と梁のない PC ブロックがそのまま内外壁となっているため、外観は日射調整と自然換気口を隠す彫の深い表情となっていると同時にセンターコアに耐震部材のない「薄く透けたコア」を生み出している。アーキニアリング・デザインとして相応しい都市型中規模オフィスの優れた提案であると言える。（堀越）

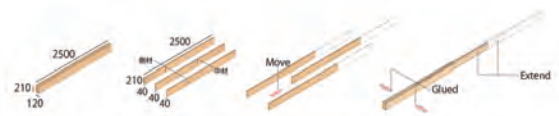
入賞

SKIP JOINT SYSTEM

(東京木工場 来客棟)

応募代表者：山田 徹 (清水建設)

共同応募者：菊田 大典、加藤 ひかる、島田 大偉、貞広 修、谷口 尚範、佐藤 彰、志村 雄、菅原 和正
和田 昌樹 (清水建設)、小野塚 真規 (オノツカ)



【講評】安価で入手しやすい一般流通木材を用いた架構システム。一本の材を、長手方向に3つに割り、中の材を半分ずらして合わせ、それぞれでアーチを形成する。接合部にはくさび材を挟んでおり、木材の収縮にも、くさびが落ちて締まることで対応するという。細い木を圧縮材として使うアイデアは意表を突くもの。シンプルなデザインでありながらも、低ライズの天井が美しく仕上がっている。今回、実現した東京木工場来客棟は、アーチのスパンが10m程度だったが、アーチを構成する材の枚数を増やし、くさびの角度を工夫すれば、40m以上の大スパンも可能だという。体育館、工場、駅などへも展開が期待できるシステムだ。(磯)

入賞

MIYASHITA PARK

立体都市公園をなめらかに包む天蓋架構

応募代表者：山崎 和宏 (竹中工務店)

共同応募者：美島 康人、町田 巖、檜垣 政弘、鈴木 康平 (竹中工務店)



【講評】渋谷駅近くにある立体都市公園で、様々な制約の中で多くのブロックをつないで空中公園を実現し、都市に新しい人の流れと賑わいを生み出している。今回応募されたのは、長さ330mにわたるその屋上公園を覆う天蓋架構で、連続したアーチ架構の間に張られたワイヤーメッシュにやがて緑が生い茂る。アーチの形状は緑の面積を最大化するように計画されている。また、長大な屋上空間に一体感を与え、活力あるパブリックスペースとなっている。この天蓋に緑が生い茂れば、今までに体験したことのない緑地空間が実現し、都市にやすらぎと動きを与えることになる。(陶器)

入賞

KU11

住みながら少しずつ手を加える手がかりとしての架構

応募代表者：小見山 陽介（京都大学／エムロード環境造形研究所）

共同応募者：木村 俊明（名古屋市立大学／KKuma）



撮影：舊の倉舎 / 笹倉洋平



【講評】都市の市街地にある住宅である。前面は農地で大きく開かれている景観を活かして、全体をトンネル状の空間としている。そのために、間口方向の壁をなくして、代わりに両側の柱を斜めの部材で補強している。この部分的に取り付けられたように見える斜材は、構造と家具の中間のようにデザインされていて、住人の生活を少しだけ規定しながら、むしろこれからの生活の手がかりとなる姿を想像させる。このような斜材は、近代の合理的な思想では評価することが難しく、邪魔な存在としてこれまで排除されてきた。しかし、この小さな斜材は、補強するというものづくりの可能性を、もう一度考えることにつながっている。（福島）

第5回 AND 賞募集要項

応募作品の対象

2019年1月1日より2024年9月末日までに完成した国内作品、あるいは国内在住の設計者等による海外作品とする。

応募資格

- 個人（複数名も可）による応募とし、重賞も可とする。複数名で応募の場合は、それぞれの応募者が応募業績にどう関与したかを応募シートに明記する。
- 一次選考を通過した場合、最終選考会（2024年2月3日（土））に参加し、プレゼンテーションを行う。

提出物

①応募シート（A4 1枚）応募シート

※応募作品の完成年月を明記してください。

②プレゼンテーションシート（A3 1枚）※形式自由

※①のエクセルデータおよび②のPDFデータ（20MB以内）を提出先までE-mailにて送付してください。

※②のPDFデータが20MBを超える場合はオンラインストレージサービスで送付してください。

※データ受領後、数日以内に「受領確認メール」を事務局より送付致します。本メールを必ず確認してください。受領確認メールが届かない場合は事務局までご連絡をお願いします。

応募期間

2024年10月10日（木）～2023/12/10（火）23:00まで

著作権

表彰作品の応募資料として提出された写真・図版等について、AND賞実行委員会は編集出版権を持ちます。また、複写権は本会に委託するものとし、本会が表彰作品の関係資料を展示、記念冊子の印刷、ホームページ等に掲載する場合、無償で使用できるものとします。

応募資料に使用する写真・図版の著作権所有者が応募者以外の場合は、あらかじめ当該著作権所有者の許諾を得た上で使用してください。

表彰件数

最優秀賞1件、優秀賞3件程度を表彰する。入賞者には賞状及び記念品を授与する。

選考方法

一次選考：書類審査により10作品程度を選定する。

最終選考：一次選考通過者は2025年2月8日（土）開催の最終選考会でプレゼンテーション（プレゼン時間10分程度＋質疑応答）を行い、公開審査（一部非公開）により最優秀賞、優秀賞を決定する。

第5回AND賞 スケジュール

2024/09/10 応募要項公開
 2024/10/10 募集開始
 2024/12/10 応募締め切り
 2024/12/21 一次選考会
 2024/12/24 一次選考通過者発表
 2025/02/08 最終選考会
 2025/02/28 表彰式及び受賞講演会

第5回AND賞最終選考会・タイムライン 司会：大野博史

13:10 集合
 14:00 開会挨拶（斎藤実行委員長）
 14:04 選考委員紹介
 14:06 挨拶（福島選考委員長）
 14:10 プレゼン（4分）＋質疑応答（6分）×4組
 14:50 休憩
 15:10 プレゼン（4分）＋質疑応答（6分）×4組
 15:50 休憩
 16:10 最終選考（10作品→4作品）
 16:40 休憩
 16:50 最終プレゼン（1分）
 17:00 最終選考（最優秀選考）
 17:30 結果発表（福島選考委員長）
 17:35 挨拶（斎藤実行委員長）
 17:40第 閉会



選考委員：左から陶器、磯、福島、堀越

一次選考会 (A-Forum)



最終選考会 (日大 CST ホール)



表彰式・受賞記念講演会 (A-Forum)



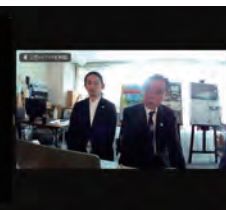
集合写真



表彰式



賞牌・賞状

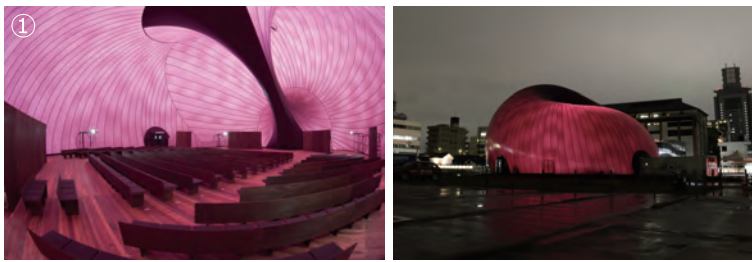


受賞記念講演

第6回AND賞2025 (予定)

募集要項は第5回に準ずる。
 但し応募作品の対象は2020年1月1日より2025年9月末までに完成した作品とする。
 【日程】募集要項発表 2025年9月初旬／応募締切 2025年12月初旬／一次選考
 2025年12月中旬／最終選考 2026年2月初旬／表彰・講演 2026年2月中旬

第1回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2020

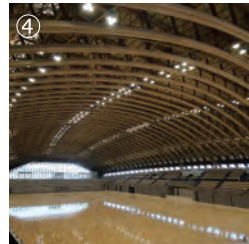


最優秀賞

- ① LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA
東日本大震災の被災地を巡回する移動式仮設空気膜構造

優秀賞

- ② スケールの異なる複層空間とハイブリッドな屋根構造 (福井県年縞博物館)
③ TBM PROJECT - CLT を用いた折板構造 V 字梁 -
④ 昭和電工 (大分県立) 武道スポーツセンターの屋根構造における「構造形態」-「部材構成」-「接合ディテール」のトータルデザイン



入賞

木頭の家 / 文化財の復旧過程を見せるための構造手法 - 熊本城特別見学通路 - / 自然の力によって波打つ天板 / CLT と鉄骨によるフィーレンディール構造 鳥取ユニバーサルスポーツセンター「ノバリア」 / 垂井町役場 / White Tube - サークルパッキングのアルゴリズムを利用したトンネル空間で、来場者に憩いの場を提供 - / CRANKS / 洗足学園 STAGE ON THE LAWN

第2回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2021

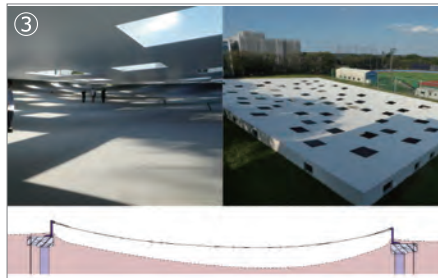
最優秀賞

- ① まれびとの家
「伝統 X デジタルファブリケーションに構造的な価値付けをする」



優秀賞

- ② 甲陽園の家 (LVL を用いた組木アーチフレーム) ③ 懸垂鋼板が空に漂う KAIT 広場
④ 閑上の掘立柱 - 震災後に嵩上げされた堤防と共存するオフィス -



入賞

GALLERY U/a / 山並みに呼応する CLT の連続円筒シェル屋根 <南予森林組合新事務所> / D タワー西新宿 / CLT 二方向フラットスラブ - 木の美しさを活かした環境型ターミナルの設計を通して - / HIROPPA 「ありきたりな材料とローテクでつくられた上品な建築」 / RYUBOKU HUT - 流木を構造体とした縄文建築 -

入選

ロッドネットで織物表現 - 桐生ガススポーツセンター (桐生市民体育館) - / FUJIHIMURO "氷穴" / Digital Garage "Pangaea" | Super Furniture / SQUAWAVE ~ 木質パビリオンから始まる人と空間の相互作用 ~

第3回 アーキエアリング・デザイン・アワード 2022

最優秀賞

① Yamasen Japanese Restaurant

ウガンダの地元技術と素材を用いた、ユーカーリによる木造建築の実現



優秀賞

② Stealth brace (ステルスブレース) 開放的な歴史的木造建物への耐震補強

③ 一松山 本興寺 本堂建替計画

④ 出窓の塔居

⑤ グラウンドルーフ

入賞

⑥ ステンレスの新しい表情を持つ” HAGOROMO BENCH”

⑦ 流山市立おおぐろの森中学校 ~サプライチェーンの構築から普遍的な技術の創造まで~

⑧ 千光寺頂上展望台 PEAK 一山頂に浮かぶ水平と螺旋の構造—

⑨ WASTE PAVILION

⑩ 斜と構



第4回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2023

最優秀賞

① 学ぶ、学び舎



② 環境を制御するコンクリートダブルスキン

—早稲田大学本庄高等学院体育館—



優秀賞

③ ラジアルアンプハウス



④ Iさんの避難観測所



入賞

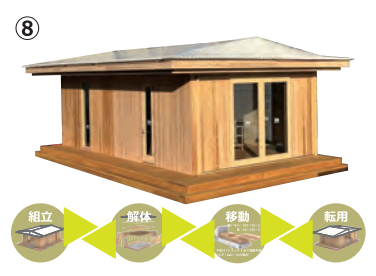
⑤ Hair room TOARU 建物の活動要素や今昔の風景、素材構法、環境性能、モノコトを建築的に組替え、多層的に混成する

⑥ 一本足の家 ⑦ TAC.Tの輪 ⑧ SHIMZ CYCLE UNIT (シミズ サイクル ユニット)



⑨ 警固竹友寮～立体的にまちと繋がる「通り土間」のある住まいを実現するハイブリッド木造～

⑩ 木と鉄骨のレシプロカル格子梁と円環状縁梁による屋外回廊「わっか」





第5回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2024

実行委員長 齋藤 公男
選考委員長 福島 加津也
選考委員 磯 達雄・陶器 浩一・堀越 英嗣
実行委員会 内海 彩・大野 博史・小澤 雄樹・小西 泰孝・多田 脩二・宮里 直也・山田 憲明
運営委員長 三輪 富成
運営委員会 和田 章・神田 順・金田 勝徳・松永 直美・春藤 元宏・麓 絵理子 (順不同)

事務局 A-Forum
101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-5-5 レモンパートIIビル5階
TEL : 03-5281-7880 FAX : 03-5281-7881 www.a-forum.info

印刷所 株式会社 グラフィック

2025.02.28